総務産業常任委員会会議録

１　日　　時　　令和４年８月２９日（月）
　　１８時５８分開会　　２０時２９分閉会

２　会議場所　　役場３階　議場

３　出席議員　　委員長：鈴木孝寿　副委員長：佐藤幸一
　　委　員：西山輝和、中島里司、奥秋康子、加来良明
　　議　長：桜井崇裕

４　事務局　　事務局長：田本 尚彦、次長兼総務係長：川口二郎

５　説明員
【清水町商工会　青年部・女性部】
髙橋青年部長、有澤、樋口、辻屋、観野、高橋女性部長、赤堀
事務局：太田、前垣
町：吉田商工観光課長補佐

６　議　　件

（１）所管事務調査について
・商工業の現状と今後の課題について

【まとめ】

（２）その他

７　会議録　　別紙のとおり

総務産業常任委員会　【開会１８：５８　閉会２０：２９】　令和４年８月２９日

（１）所管事務調査について
・商工業の現状と今後の課題について
【清水町商工会　青年部・女性部調査】（会場：役場３階　議場）

【開会　１８：５８】

委員長（鈴木孝寿）：只今より、総務産業常任委員会の所管事務調査を開催する。業務お忙しい中出席いただいてありがとう。今回はコロナ、そしてウクライナの戦争を含めて経済状況がものすごく悪化してきている中において、先般は農業関係者とお話しをさせていただいた。それとともに商工業のみなさんともお話しを聞いたうえで、今後、町として何ができるのだろうか、町としてはどういうことをすべきなのだろうか、それらを含めて我々の中で調査をして、結果を町の理事者に対して報告していくのが調査の流れになる。皆さんの忌憚のない意見、商工の立場として困っていること、もしくは何かをしてほしいことを含めて、時間があれば町づくりも含めて皆さんの立場としてご意見をいただければと思う。25日に商工の理事の方々と会合を持たせていただいた。その時にも色々お話しがあったが、話がかぶっても構わないのでよろしくお願いしたい。

（出席者紹介）

【質疑応答】

委員長：今回聞きたいのはコロナ禍及び経済状況の激変。今皆さんが困っている現状があればお知らせいただきたい。先日は働く人手が少ないということで、働き手の確保をしっかりやってほしいということと、町政もそういうところに力を入れてほしいということであった。コロナ禍で今の商売が厳しくなってきているというのを実感されているのはどういうところなのか。

髙橋（富）：日本全体がそうだと思うが、物が値上がりして仕入れが上がっていて価格を上げようかというところに直面している。消費者としては何でも上がっていてまたかということにもなりかねないところなので、技術の面ならまだしも使うものが上がってきている実感はある。

委員長：現状ではまだ上げていないのか。

髙橋（富）：どうしようかというところ。

委員長：小売りの例えば飲食の世界でも８月から上げられているところも結構あるし、これから上げざるを得ない方もたくさんいると思う。原料も値段が上がってきているというのはよく聞く。同じような業種でそういうのがあるという方いますか。

樋口：うちは値上げしますよという立場ではないので、自分みたいな小さな会社は信頼と実績を積み重ねていかないと仕事ももらえないし、来月から燃料上がったので運賃１万円上げてくださいと簡単に上がるものではないので、それはお客さんとの話し合いの中で決めていかなければならないので、なかなかそういう部分では厳しいところはある。

委員長：親会の方でお話しをした時に、運送業の方も大変だと話していた。実際上がってきたのは春先以前だったと思うが、その間の利益はどうか。運送業の方に聞くと利益は飛んでいると、結局赤字につながっていくという話だが。

樋口：うちは北海道から本州に荷物を運ぶのが主な内容だが、フェリーを使って本州に運んでいる。そのフェリーに乗るのもサーチャージがかかる。サーチャージも３か月に１回見直されて燃料が上がれば３か月に１回上がる。今上がっている状態でシャーシーという大きな箱、コンテナがあるが、それを１台乗せるのに運賃プラス、サーチャージ２万円とられる。１日３本乗せたら６万円。それが無駄にかかっている。そいう部分での補填をしてくれればいいが、なかなかお客さんは理解してくれないというのが現実。

赤堀：これから冬に向けて灯油の問題が大きいと思う。薬品とかももちろんだがコロナでお客さんの入りも若干厳しい。キャンセルがあったりする。

辻屋：値上がりしているというのは一緒ではある。値上がりだけでお金を出せば買える状態であればいいが、だんだん今、お金を出しても物が入ってこないとか、手に入らない状況になってきている部分が怖い。この先円安が続くにつれて物の値段はどんどん上がるし、お金払えばとりあえず手に入るならいいが、だんだん手に入らない物が増えているし、その部分が今後どうなっていくか、そこの対策を考えたほうがいいのではという気はしている。

有澤：衣料品でも今、主に値上がり関係で出ているのが作業着関係が10％から20％、秋冬物から上がるという話がある。じわじわと糸の値段が上がっていて、タオルも値上がりしてくる。アパレル業界自体も低迷というのもあって仕入れ先が辞めていっていて、うちとしては仕入れ先を開拓していかないと仕入れる物がないというのが課題としてある。

委員長：仕入れ先の云々というのはコロナで。

有澤：コロナで売り上げ減少じゃないかと。８年以上前は札幌とかに色々あって10件くらいあったのも今は半分くらい。道内ではどうしようもないので東京なり大阪なりに出てどんどん開拓していかないと維持が難しくなるのかという現状である。

観野：皆さんと同じで、材料費も上がっているし商品自体も上がっている。まだ清水は恵まれていて、地域商品券でなんとかしのいでいる。これがある時期とない時期ではすごいお客さんの購買意欲も違うし、毎月毎月値上げの連絡しかこないので、これから先どういうふうにやっていけばいいのか頭を悩ませている。

髙橋（幸）：着工数が確実に減っている。なぜかというとローンの申請が通らないということに尽きるのではないか。給料も上がっていない。

委員長：大きく売り上げが下がってきているという方。友人、知人などでも、どういう業種が多いのか。

髙橋（富）：飲食関係、スナックとかでもカラオケ外したとか。来ないしコロナだから歌えないとか。

有澤：アパレルだけやっているところは閉店しているところが多い気がする。

委員長：今、皆さんの方で特にこういうふうにしてやりだしているというような、工夫はあるのか。

髙橋（富）：今に始まったことではないが、人がいない。人を増やさないことには、お客さんは30年以上やっていると本当にいなくなった。いなくなった割には新しいお客さんが増えるわけではないので、待っていたのではどうにもならないから今は訪問をやっている。

辻屋：小さいことで言えば、うちらあたりのお肉とかって、スーパーと比べられるものが多くて、特に既製品とかはスーパーの値段と完全に比べられて、ウインナーが辻屋では500円でスーパーだと400円だとか、つぶさにお客さんは確実に見ている。うちあたりは逆にスーパーよりも安くする。ウインナーに目を引かせて来てもらう。ただスーパーより安くするというのは利益ない売り方なので本当は良くないが、そういうものもつくってお客さんの目を引いて、一つの商品でも来てくれるので、そういう努力は必要になってきている。

観野：工事修理関係をなるべく自分でやる。今まで依頼していたものも自分でやるようにして利益を確保できるように勉強している。

樋口：燃料の話になるが、契約しているガソリンスタンドがあって、そのお店お店で単価が違うので、仲のいい運送会社に行って値段聞いて入れさせてもらったりしている。

加来委員：親会と現状について調査したけれども、その時の話では消費力はあると、ただ人材的に人がいないために仕事を受けられない、だから雇用を埋めるような政策を考えてほしいという意見が多かったが、一概にそうも言えないようなことなのかなと。親会の分析がどの程度しているのかわからないが、コロナ禍での融資とか受けている中でもそれなりに借り換えしたりして繋いでいけていると、返済が始まるけども、そういうことにも対処できているというような説明であったが、皆さんとしてはどう感じるか。

有澤：金銭についてはタッチしていないのでわからないが、仕事に関しては家族経営している中でまわらないということはないので、その辺に対する要望というのは感じてい

なかった。人材がどうのということは。

辻屋：お金を借りて、結局返さなくてはならないお金であれば、それを上回る利益を出していないと返せないので、今の値上の状況でお客さんに転嫁できない状況であれば、基本的に借りた金は返せない状態が小売りの世界では当たり前じゃないかなと思う。正直、自分でもし借りていたらそれ以上の利益を、今以上の利益を出していかないと返せないので、自分の給料減らすなり何かカットしていかないと返済にまわらないというのが、たぶん借りている所の現状じゃないかなと思う。ただ、清水町は商品券を発行していただいているので、その点は非常にありがたい。たぶん小売りは皆そう思っている。カードとカードの空白期間の買い控えのすごさといったらなかった。１か月あけるだけでも売り上げがガタンと下がるくらいの買い控えがあるので、できれば間を空けないでやっていただきたい。ただ、これがあるから清水町はお客さんも動くし買い物もしていただけると思うので、これがなければ安いところに買いにいってしまうのが現状だと思う。たぶん清水にお金は落ちない。清水にお金が落ちるという意味では商品券は抜群の効果があるし、ありがたいと思っている。

委員長：サービス業としても商品券の威力は大きいのか。

髙橋（富）：大きい。家には現金なくなるけど。

委員長：近隣町村の商品券のやり方はどんな感じか。

吉田課長補佐：パーセントが高いのはいっぱいあると思うが、清水は去年から希望した枚数買えるようにした。そこは全然違うと思う。

髙橋（富）：でも皆30％に慣れちゃって低くなったら買わないという人もいる。

委員長：商品券はある程度所得ある方は買える。年金生活している方は大変という声は聞こえる。商品券の使い勝手も含めて全体として何かあれば。

辻屋：元々はスーパー自体に落ちる割合って、昔はいちまるとかもあった関係ですごく多かった。ただ、今は１店舗しかないのと、割とパーセンテージはどんどん小売りに落ちてきている部分がある。ただ一般の家庭にとってはスーパーが入っていないとなかなか使いづらい面もあるのでスーパーが入っているのはいいと思う。ちょうど今はバランスがいいのかなと思う。

委員長：使う立場としてはどうだろう。

髙橋（富）：上限20万円といったら、目的があって買う人が結構いると思う。

委員長：商品券については今のところ悪くはないと。町に対してこういう政策をしてほしいというような意見があれば。町づくり全般でも結構。こういう政策があるといいというようなものがあれば。

辻屋：前に商業部会の小委員会というのがあって、そこで話していた時に考えたことがあって、店舗が減っていってこれから更に10年、20年経てばかなり半減すると思う。その中で新しく商売をする人を取り込む政策が必要じゃないかと考えている。それにはどうしたらいいかというと、やる人がリスクを薄めに若くてもチャレンジできるように町で店舗を用意してそこにどうぞやってみてくださいというような、デモ店舗みたいなものがあったら面白いという話をしていた。他の町からでも、清水ならリスクなくこんなことができるならやってみようかなという人が全国から宣伝して集めれば何人かは来るのではないかと思う。

有澤：体育館新設の関係で会議とか出席させていただいているが、会議の流れとして、今はただ建てるだけとなっているのが不安なところがあって、清水町に滞留してもらってお買い物できるように、合宿とか外から人を呼び込めるような体育館に、今は町民の健康のための体育館を建てると。建ててしまえば50年使うので、有益に使える体育館を考えて、この１年でダメな50年を過ごすくらいなら、もう１年かけてもいいから良い50年にした方がいいと思う。

加来委員：他の町の方とも話をすることも多いと思うが、他の町の取り組みを聞いて清水に取り入れたらいいとか、こんな町づくりしたらいいとかいうようなお話があれば教えていただきたい。

髙橋（富）：上士幌が人口増えているが、子育てにすごく優しい町になって、その子たちが大きくなって、出て行ってしまってはどうにもならないという話はあった。そういうふうにして人を増やすのも大切だけれども、それがなんとか残ってくれるような政策がなければだめだよねという話はしたことがある。

髙橋（幸）：いい例としてあげたい町があるが、本別町は若者が進んで色々発信したり作るのが上手な町で、豆まかナイトという豆を使ったイベントができないかと、始め農協青年部から声が上がったらしい。そして商工会青年部の部長さんがイベントは商工会青年部が得意だということで、農協青年部と商工会青年部がマッチングして町おこしとしてやっている。町を盛り上げようというスタンスが重要なのではないかと思っている。

加来委員：農業青年と懇談会をやった経緯があるということであるが、何回くらい。

髙橋（幸）：清水町としてやったのは１回だけ。コロナの影響もあり１回しかできていない。

加来委員：続けようという話にはならなかったか。

髙橋（幸）：なっている。ぜひ続けていきましょうということで話をしている。

加来委員：行政の若い職員も一緒に入って町づくりできたらもっと広がりがでる。

桜井議長：高橋部長の農村部の青年とつながりを持ちたいという話は会った時から聞いてい

た。40年も前には青年団体連絡協議会という町の青年と農村部の青年が一つになって事業を展開していた時期がある。その時は行事も多くて盛り上がった時代であった。親会と話をした中でも、最終的には町と農協と商工会のつながりがないという認識を持っている。一つ聞きたいが、率直なところ道の駅についてはどのような考えを持っているかお聞かせいただきたい。

髙橋（幸）：率直に道の駅に関して経済効果等はわからない。道の駅が何のために清水町にとって必要なのかがわかればいいなと思う。

辻屋：どこの町でも道の駅って赤字というのがあって。赤字を垂れ流すものを私個人なら作らない。商売人としての考えだと絶対作らない。ただ、それ以上の価値が、お金以上の価値があるのであれば作るべきだと思うが、それを示せないなら作るべきではないと思う。

髙橋（富）：昔は道の駅あったらいいなと漠然と思っていたが、きっと大変だろうなと。実際にどこに作るとか色々考えてみた時に果たしてどうかなと。であるならば、どこの町にもほとんどあるので、それを逆手にとって道の駅のない町としてもいいのかなと思う。

有澤：新しく作らなくちゃならないのかなと。日勝のとかち亭さんも観光物産を売っているので、あそこを道の駅としてフォローしてあげるような形はできないものかと。新設する必要があるのかと思う。作ると逆にとかち亭さんを圧迫するのではないか。

委員長：今後皆さんが町づくりに望むこと、こういうことをやってほしいというものがあればお聞きしたい。

佐藤委員：話を戻して申し訳ないが、道の駅。私も商工青年会の時に道の駅を作ろうという話があった。その時には商店もいっぱいあったし、小売店がいっぱいあった。そういった中で道の駅をつくればそちらにお客さんがいって、町の中にこなければなにもならないと思ったから私だけ反対した。正式になるまえに潰した経緯がある。

髙橋（富）：農協青年部と一緒にという話があったが、昔は食の安心安全まつりを一緒にやっていて、結局清水は何もなくなったという印象がある。お店を出すときには大変だったけどなくなったらなくなったで寂しい。また復活するならば農協の女性部と交流できるのかなという気はする。

委員長：最後に皆さんから何かあれば。

赤堀：どんどんどんどん人が居なくなっちゃって、清水はまだ若い方がいてちょっと盛り上がりつつある。御影は女性部５名。だから何ができるのだろうという段階で、くすぶっている。御影も栄える何かがあったらいいなと思う。せっかくアリーナがあるので、合宿所が御影にあるといいと思う。

太田：コロナ禍になって人とのつながりは希薄になり、部の中でもそれが顕著にあると感じ

ている。コロナが明けた時に本当に元の青年部に戻れるのかという気がする。２年後には12、13人は定年でいなくなってしまう。そうした時に青年部それぞれがつながっていないと成り立たないというところは事務局として危惧している。

前垣：一個人として、先日キャンピングカーで60代のご夫婦で犬を連れてまわられている方とお話しする機会があった。10年間毎年清水公園で泊っていると、今年に入ってお風呂があることを初めて知ったと言われた。ドックランがあることも知らなかったと。ネット情報も大事だが、一目でわかる看板などがあるといいのかなと思った。

委員長：この後、親会の話をまとめ、皆さんとの話をしっかり文書という形でつないで、まとめていきたいと思う。またこういう機会があればご意見を頂ければと思う。以上をもって総務産業常任委員会の所管事務調査を終了する。

【閉会　２０：２９】